高知城

維新の風が吹きわたる

国指定重要文化財

文／桑野佐恵子　写真／小田﨑智裕
取材協力／高知城管理事務所　高知県立坂本龍馬記念館

築城410年を超える高知城―。
創建当時の姿をそのままに
天守や本丸、追手門などが現存しており、
全国でもほかに類例のない名城である。
この天守を仰ぎ、日本の未来を語り合い、
維新をけん引した土佐の偉人たちは数多い。
高知は、坂本龍馬、武市半平太(瑞山)、中岡慎太郎、
そして幕末の四賢侯の一人・山内豊信(容堂)、
板垣退助、後藤象二郎などを輩出している。
徳川幕府創設に奔走した初代藩主・山内一豊(かつとよ)に対し、
大政奉還を建白したのも十五代藩主・豊信(容堂)という
皮肉な歴史の変遷が、この城には刻まれている。
〝いごっそう〟な男たちのドラマが
今も生き生きと息づく
高知城をめぐる時代旅行へ、さあご案内しよう。

＊いごっそう…快男児、酒豪、頑固で気骨のある男などを表す土佐弁

天空を割する城

高知県庁、高知市役所などの行政機関が立ち並ぶ高知市の中心部、小高い丘のような大高坂山から市中を見下ろすように高知城は建っている。戦国の世から変わらず、ここは国の中心地であり、城とともに歩んできた誇りを感じさせるまちだ。

高知城の築城が始まったのは、慶長6年（1601年）。享保12年（1727年）に大火に見舞われ、追手門を除くほとんどの建造物が失われたものの、およそ20年を掛けて天守をはじめ、すべての建造物が創建当初の姿のままに再建されたという。

かつて司馬遼太郎が、「事、成就すれば『天にもっとも近い者』であることを人に知らしめるために天空を割するような城をつくる」と、国盗り物語」に記した。この三層六階にそびえる白亜の城を造った〝天にもっとも近い者〟は、山内一豊だが、その築城の際に一豊を脅かす者がいた。長宗我部元親である。

〝土佐の出来人〟長宗我部元親

戦国時代、四国では〝土佐七雄〟と称される勢力を中心に、国侍や土豪たちが血みどろの抗争を繰り広げていた

追手門越しに見る天守閣は全国でも珍しく、高知城の見どころの一つ。追手門の天井には石落としが隠されており、有事には敵を撃退する武器となる

長宗我部元親から山内一豊へ 死生知らずの一領具足

山内一豊像
高知城追手門傍に立つ像は、騎馬像としては国内最大級。城内には妻・千代の像をはじめ、板垣退助など、土佐ゆかりの人物像が点在している

長宗我部元親初陣の像
永禄3年（1560年）、22歳で初陣を迎えた元親の像。足元には四国の領土が描かれており、四国を掴み取ろうとする元親の力強い姿を描いている

という。その中から足利将軍家の信頼厚く、豊穣な領地を有した長宗我部氏が頭角を表し、土佐一国を領するまでに勢力を広げていった。

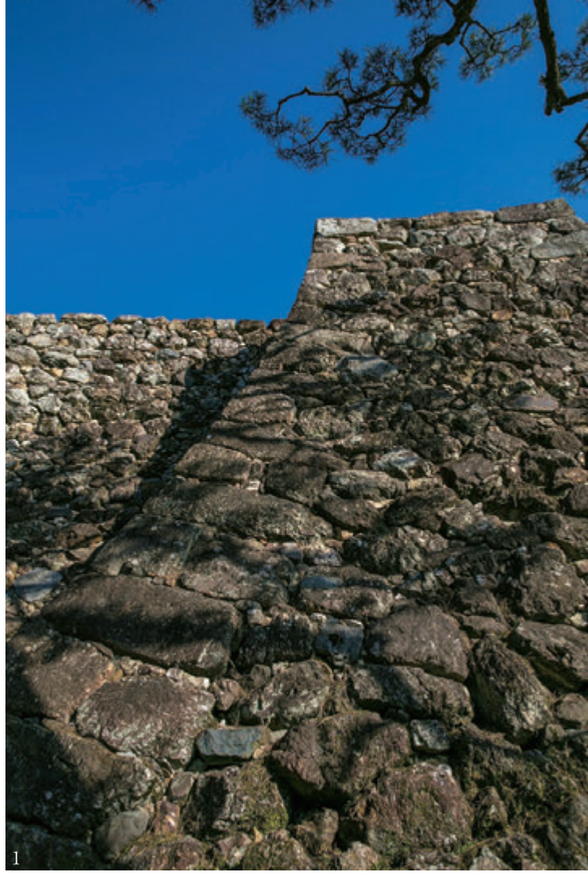
二十一代・元親は〝土佐の出来人〟と称えられ、その人格と武勇で慕われた名君である。元親は土佐の名家、一条家を滅ぼして、天正3年（1575年）に土佐を統一し、念願の四国全制覇へと乗り出した。

元親の戦略を支えたのが、「一領具足」と呼ばれる屈強な男たちだ。いわゆる半農半士の武士集団で、一領の具足（鎧など）と槍を与えられ、戦場を縦横無尽に駆けめぐったという。「土佐物語」に、「死生知らずの野武士なり」と記されたほど、その忠節と武勇は際立っていた。

命を賭して自分に仕える一領具足たちと自らの武略をもって、同13年（1585年）にはついに念願の四国統一を果たした元親だったが、武運もそこまで。豊臣秀吉の四国出兵に屈して阿波、讃岐、伊予を失い、土佐一国のみを安堵される。

秀吉に忠誠を誓い、土佐と長宗我部家を守った元親は四男・盛親に領国を託して没するが、関ヶ原の戦いで盛親が石田三成率いる西軍に従じた結果、領国の全てを失ったのだった。

家康の心を手玉に取り、山内一豊、宿願の一国一城の主へ



(1)近江が誇る石工集団・穴太衆(あのうしゅう)による石垣。野面(のづら)積みで風雨に強いと、妻・千代が進言したという (2)石垣は創建当時のもの。大手門横では、「ウ」「エ」「ケ」「シ」などのカナ文字を見ることができる。施工者の刻印だろうか (3)本丸御殿としては、全国で唯一完全に残された書院造り御殿を見ることができる (4)鉄串が突き出た'忍び返し'や石落としなどの防備を備えた守りの城だ

(5)藩主の居室。上段の間には'武者隠し'が設えてあり、有事に備えた (6)天守最上階から眺めた高知市内。文久2年(1862年)3月、この城下町を出発して、坂本龍馬は脱藩したという (7)藩主の座から見える風景の中に、山内家歴代の墓地が見える設えに、一豊の思いが偲ばれる (8)室内の装飾に刻まれた山内家の家紋'三つ柏'

家康もほろり、千代の内助

関ヶ原の戦いに泣いたのが長宗我部氏なら、高笑いしたのは山内氏だった。山内一豊は、それまで掛川5万石の城主だったが、東軍への貢献が認められて土佐藩20万石余を拝領する。その陰に、妻・千代の内助の功があったエピソードは、小説・功名が辻・にも記されている。

徳川家康に従って関東へ出陣していた一豊へ、千代が送った・笠の緒の文・の才覚は、千代の賢妻ぶりを表している。敵の石田三成が、家康に伴い関東へ出陣している諸大名屋敷へ、自分に味方するようにと寝返りを勧めた勧誘状を送ったことから、千代はその勧誘状と大坂の情勢を詳しく綴った夫への手紙を入れた文箱を用意した。文箱を開封することなく、家康に見せるようにと笠の緒にこよりのように密書を結びつけ、家臣に届けさせたのである。

一豊は妻の意を汲み取り、家康にそのまま差し出した。文箱を開けると三成が挙兵に備えて味方をつのる証拠と大老や奉行が謀反を企てて動き始めたことなどを綴った千代の手紙。さらに「あなたは家康様への忠節にお励みください」と記されていた。喉から手が出るほど欲しかった大坂の情報と千代の言葉。そして、私信を開封せずに差し出した一豊の忠節に、家康は感動し、一豊への信頼は揺るぎないものとなった。天下人・家康を手玉に取ったような千代のお手柄である。

また、関東小山での軍議の場で、福島正則が口火を切った家康への従軍宣言に続き、一豊が「掛川城を徳川殿に明け渡し、兵糧も提供致す」と明言したことが、我も我もと東海道筋に領地を有する大名たちが城を差し出す引き金となり、後の関ヶ原の戦いを勝利へと導く礎となった。この夫婦の見事な連携プレーで、一豊は念願叶って一国の主となるのである。

無念、一領具足の悲劇

土佐一国授与の命を受けた一豊に対する、家康の言葉が振るっている。関ヶ原の戦いへの参陣について「山内対馬守の忠節は木の本、そのほかの衆中は枝葉の如し」とまで言い、大坂へ一豊を呼んで自ら茶を点ててもてなした。一豊以外の大名は枝葉に過ぎないとは、例えられた方はたまったものではないだろう。さらに家康は、一豊に土佐入国の準備のための暇を与えたという。

時に一豊56歳。大器晩成型といわれる所以だが、順風満帆に見える出世劇はその直後に苦難の時代を迎える。

長宗我部氏の影が付きまとう
高知城築城と身分差別

いざ土佐入国という段になり、長宗我部氏の遺臣が牙をむく。家康は井伊直政が城を一旦受け取った後に一豊へ渡すよう命じていたため、先に使いが土佐へと出港した。

主君である長宗我部盛親はすでに追放されていたが、その処分に不満を持つ遺臣は、一豊の居城となる浦戸城を占拠してしまう。その遺臣とは、元親を支え続けたあの一領具足の兵士たちだった。「我らの主君を生け捕りにされては、城を明け渡すわけにはいかない」とばかりに、遺臣たちは鉄砲1，000丁を並べて攻撃を仕掛ける。

願わくば土佐半国、無理ならば2郡、いや1郡でもと、長宗我部氏の領地を守ろうとする遺臣たちは、要求が通らぬ限りは城の明け渡しには決して応じないという態度を変えず、ついに浦戸一揆が勃発する。そしてあろうことか、一揆軍が首将として迎えた重臣・桑名弥次兵衛が、「一領具足共一揆を成すこと、忠に似て忠に非ず」と一揆軍に味方すると見せかけて寝返り、一揆軍は、その菩提寺である雪蹊寺など各地で一蹴された。

なんと一領具足273人の首が打ち取られたという。そしてこの時の一領具足の無念、そして怒りが、幕末、維新の風となって土佐に吹き荒れることになる。

ぬぐい去れぬ長宗我部氏の恐怖

かくのごとき曲折を経て、無事浦戸城に入国した一豊は、自らの威厳を国に示すべく、慶長6年（1601年）9月、新しい城と城下町の建造に着手する。

しかし、一豊は、長宗我部氏の影におびえていた。1日おきに工事現場を見回る一豊は、5人の影武者を従え、遺臣の襲撃を警戒したという。

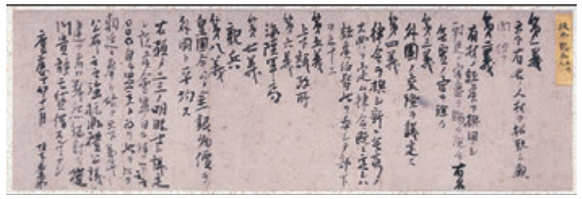
また、山内家臣を中心とした武士を上士、長宗我部遺臣などを下士とする身分制度を作り、差別を徹底した。上士のみが城周辺の決められた場所に屋敷を持つことができた一方、郷士以下の下士は高下駄を履くことも禁じられ、衣服の質まで差を付けている。この身分差別は幕末まで続き、郷士たちに耐えがたい屈辱をもたらしてゆく。

一豊が築いた山内氏安泰の時代は260年の長きにわたり続くことになるが、やがて幕末へ向かって時代は急転していく。

太平洋に面した桂浜は、月の名所として知られ、"よさこい節"にも歌われている。海を望むように坂本龍馬像が立ち、高知県立坂本龍馬記念館もほど近い。記念館前には浦戸城跡の碑も佇み、一帯で土佐の歴史を体感できる

坂本龍馬があらすじを書いた日本の夜明けがやってくる

山内豊信（容堂）
早世した14代に代わり、15代藩主に。革新派であった吉田東洋を参政に起用し藩政改革を行った。公武合体派の重鎮となり、幕政改革を推進。自らを‘鯨海酔侯（げいかいすいこう）’と称し、酒や歌をこよなく愛したという



龍馬が慶応3年（1867年）に、新国家体制の基本方針として起草した新政府綱領八策（複製・高知県立坂本龍馬記念館蔵）。龍馬が作り、後藤象二郎とまとめた‘船中八策’が原型となっている

黒船来航。幕政改革へ

嘉永6年（1853年）、マシュー・ペリー代将の来航により、それまで鎖国を貫いてきた日本に激震が走った。そのとき、土佐の藩兵として江戸湾警備の任についていたのが坂本龍馬である。まだ19歳の龍馬は、剣術修行のために江戸に出ており、偶然にも黒船に遭遇したらしい。

龍馬は郷士だったため高知城内には入ることができず、城下を清掃するなどの労に就いたとされる。さまざまな身分差別を受ける中で「何故、人は差別されなければならないのか？」という屈とした思いを抱いていた。

黒船来航により必然的に世界との関わりを迫られ、開国の是非をめぐる国論の対立から、行き詰った幕政改革へ向かう動きが加速する。安政の大獄、桜田門外の変と続き、国内情勢が一変。弾圧を受けてきた尊王攘夷派の反動が爆発し、報復・暗殺が横行する物騒な時代に突入した。

日本を今一度洗濯いたし申候

土佐藩では、十五代・豊信（容堂）が藩政を握っており、朝廷と幕府を一体化させる公武合体への道を模索。その一方では、武市半平太（瑞山）らが、尊王攘夷を掲げ土佐勤王党を結成するなど政治的な動きが活発化する。

龍馬は一旦、土佐勤王党に加盟するも、自らの思いを遂げるため、2カ月後には脱藩に踏み切った。その後、勝海舟と出逢い門下に入る。貧しい中で勉学に勤しみ、万人の公平を目指した海舟と身分差別のない世の中を求める龍馬が出逢った時、静かに改革の歯車は回り出した。

坂本龍馬
幕末期にあって世界を視野に持ち、「日本の坂本龍馬です」と自己紹介したという。身分制度を廃止し、差別のない世の中を夢見て、藩政改革に奔走。大政奉還が行われた翌月、中岡慎太郎と共に暗殺される。享年33歳（満31歳）。

「日本を今一度洗濯いたし申候」と姉の乙女に記したのはこの頃のことだ。

やがて龍馬は中岡慎太郎らと、政敵である薩摩と長州を和解させて、幕府に対抗する一大勢力とする計画を立てる。世に言う薩長同盟である。龍馬が亀山社中を通じて薩摩から新式小銃を買い、長州へ売ることを条件に同盟締結を成功させたことで、大局は一挙に維新へと走り出す。

その翌年、慶応3年（1867年）、後藤象二郎の進言を受けた豊信（容堂）が，大政奉還，を十五代将軍・徳川慶喜に建白し、家康以降、260年にわたった徳川政権は幕を閉じる。その原案‘船中八策’を策定したのは龍馬だった。差別という制度を作った山内氏とそれを憎み続けた龍馬がつながり、同じ目的を達した瞬間は、龍馬の心にどのように映っただろうか。

山内氏十六代の居城であった高知城に立てば、平等と変革を求めた偉人たちのドラマが今なお胸に迫り来る。

龍馬に逢える高知ゆく

高知の旅なら、まずここに行かなければ始まらない！
坂本龍馬の軌跡をたどるスポットや
“おいしい高知”を満喫するグルメスポットを
ご紹介しましょう。

龍馬につながる場所へ　高知県立坂本龍馬記念館

桂浜を臨む坂本龍馬顕彰の地，高知県立坂本龍馬記念館，。真の平等と公平を求めて立ち上がった龍馬の原点をここに見ることができる。

私心無く志高く、公のために命さえ投げ出す龍馬の生きざまを知る貴重な史料の数々。真筆の手紙を読み進むうちに、目の前に龍馬が立ち上がり、生き生きと語り始める。

語りかければ、きっと答えは見つかる。龍馬に対峙するひとときを過ごしたい。

桂浜からほど近い絶景の地に建つ。太平洋を一望できる‘海の見える・ぎゃらりぃ’も必見

高知県高知市浦戸城山830
tel. 088-841-0001
営業時間／9:00〜17:00
定休日／なし

城下町の暮らしが今に蘇える　高知市立龍馬の生まれたまち記念館

龍馬が生まれた本丁（現・上町）は、郷士のほかにも職人や商人などおよそ800軒の家が立ち並び、互いに助け合い、豊かに暮らしていた。

そんな龍馬が生きた時代を体感できるのが，龍馬の生まれたまち記念館，。

当時の町並みを再現したジオラマ模型やある日の坂本家との暮らしを垣間見る映像、そして龍馬の遺志を継いだ人々の軌跡など、楽しく学ぶことができる。

観光ガイドとめぐる‘土佐っ歩’など、楽しい体験コースも用意している。（要事前予約）

高知県高知市上町2-6-33
tel. 088-820-1115
営業時間／8:00〜19:00
（入館は〜18:30）
定休日／なし

高知グルメと酒が一堂にそろう　ひろめ市場

酒豪で旨いもの好きだった龍馬にあやかって、高知グルメを楽しむならぜひ行きたいのが，ひろめ市場，。

目の前で香ばしくあぶったカツオのたたきは、たっぷりの厚切りにして、塩で食べるのが高知流。ネギやニンニクなどの薬味を添えて、日本酒で一杯やろう。また、清流・四万十川の手長エビや川のり、濃厚な旨みを味わえる地鶏，土佐ジロー，など、高知ならではの食材を多彩にいただけるのがうれしい。

土佐ジローの焼き鳥と肉厚に切り分けたカツオのたたきは、産地ならではの味わい

高知県高知市帯屋町2-3-1
tel. 088-822-5287
営業時間／8:00〜23:00
（日曜は7:00〜）
定休日／店舗によって異なる